様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月１１日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007-2008
課題番号：19820003
研究課題名（和文）主語名詞句の統語的位置と認可に関する言語喪失研究からの検証

研究課題名（英文）Syntactic subject positions and subject licensing: Verifying from studies of language breakdown.

研究代表者:上田由紀子(UEDA YUKIKO)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号 90447194

研究成果の概要：
理論言語学の視点から，モーダル形式と主語名詞句の人称制限の現象を用いて，以下のことを主張した。（１）日本語の主語名詞句統語的位置は，英語のそれとは異なり，時制辞 T の指定部とは限らない。（２）日本語の「が」格主語は，時制辞 T よりも構造的に高い，A'位置からの認可を受けている。この主張（１）—（２）に対し，言語喪失現象からのさらなる検証を試みた。結果は，（３）上記（１）に関してはブローカ失語の被験者は，Miyagawa (2001)の主張する２つのタイプの scrambling 構文において，生成能力に差があった。これは、派生の異なる２つの scrambling が存在することを示し，その帰結として主語は、*v*P 内にも存在することを示すことになる。（４）上記（２）に関しては，時制辞 T より構造的に高い A'位置の関与を仮定した，「が」格付与能力と A'-scrambling の生成能力には，顕著な相関は今回の調査では見られなかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	0	1,200,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	360,000	2,760,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：主語名詞句，主要部 C，A/A'-scrambling，失語症，文法処理

１．研究開始当初の背景

理論言語学における日本語の「が」格主語の統語的位置に関する研究の背景として，Takezawa(1987)以来，生成文法における多くの先行研究において，特に議論するなく無く，便宜上，英語の主語位置と同じ，時制辞 T の指定部を日本語の主語位置として広く仮定してきた。これに対し，Kuroda(1988)，Miyagawa(2001)および Fujimaki(2005)などは，日本語の「が」格主語が *v*P 内に留まっている可能性を主張した。Ueda(2002, 2005, 2006)では、日本語の機能範疇である時制辞 T は，不完全で，指定部を投射しないとする Fukui(1987)の主張をさらに発展させ，日本語の T は，統語的には，活性化されない為，派生上の統語操作に関与できず，日本語の

「が」格主語の認可はＴでは，行われないことを日英語における数量詞の解釈の違いから主張した。すなわち，日本語の「が」格主語は，英語のそれとは異なり，時制辞Ｔの指定部にはないことを主張した。

失語症研究，特にブローカ失語の研究，の背景としては，主に，wh 疑問文の解釈と生成を用いての研究が盛んに行われてきた。それらの障害を統語の障害として扱う立場としては，意味役割付与に起因させる Linebarger(1983)の Mapping Hypothesis，移動の後に残る痕跡(trace)の消失に起因させる Groodzinski(1986) の Trace Deletion Hypothesis また，構造上高い位置に生成される投射が刈り込まれると考える Tree Pruning Hypothesis などのアプローチが報告されてきた。日本語失語症に関しては，Hagiwara(1995)および萩原(2000)が，ブローカ失語の被験者は，構造上高い位置のものには，アクセスしにくいことを主張した。

欧米言語の研究では，wh 疑問文など移動が見える構文を使い，上記のような様々なアプローチが提案されているが，日本語失語症に関しては，統語的立場からの失語症研究の報告は，数が少ない。

２．研究の目的

本研究では，生成文法の極小理論の枠組み（Chomsky 2000, 2001, 部分的に 2008）を仮定し，以下の２点を目的とした。

（１）　言語理論の立場から，日本語の主語名詞句の統語的位置が，必ずしも，英語の主語名詞句と同様に時制辞Ｔの指定部とはかぎらないことに関して，数量詞解釈以外からの証拠を提示すること。

（２）　（１）での主張を日本語の失文法現象からさらなる証拠をあげること。

３．研究の方法

（１）に関しては，時制辞Ｔよりも構造的に高い位置にあらわれる真正モダリティ形式（発話・伝達モーダル形式）に焦点をあて，モダリティ形式と主語名詞句との間の人称に関する一致現象を分析した。

（２）に関しては，日本語の主語名詞句が時制辞 T の指定部以外にも存在することを Miyagawa(2001) の２つのタイプの scrambling①太郎さえ　花子が　殴った。（A-scrambling）と②洋子を　次郎が　殴りもした。(A'-scrambling)を使用し（実際は，二重目的語構文の内項同士の scrambling も A-scrambling として行った。),その理解と生成可能性および「が」格主語の可能性をインタビュー形式で調査した。被験者は，ブローカ野を含む領域に病変を持つ５５歳から７０歳までの右利きの男女２０名。理解に関しては，呈示文を音読してもらい，文があらわしているイベントの絵を４つの選択肢から選んでもらうタスクを課した。読むスピードは本人のペースに任せた。生成に関しては，絵を見ながら，タスクの問題文の下線部に相応しい助詞を入れてもらうタスクを課した。答えは，口で言ってもらうか，カードに書かれた助詞を手で指し示すかのどちらかの方法で，行ってもらった。反応時間等は，測らず，本人のスピードで答えてもらった。１０秒以上かかっても迷って答えられない場合は，理解・生成できていないものして扱った。

４．研究成果

【主要な成果】

研究目的（１）の結果は，日本語には，英語のような時制辞と主語名詞句間の一致現象はないが，時制辞より構造的に上位にあるモーダル形式と主語名詞句の間に人称に関するある種の一致現象があることを観察し，言語理論上もそれは妥当なことであることを示した。Alexidou and Anagnostopoulou (1998)の EPP パラメターの仮説を採用した上で，日本語に置いて，時制辞Ｔよりも構造的に上位の主要部で人称に関する一致 AGREE が行われているとすると，日本語の主語名詞句は，時制辞の指定部よりも構造的に上位の指定部にいるか，或は，AGREE により移動を伴わず，*v*P 内に伴っているか両方の可能性があることをモーダル要素から主張した。

研究目的（２）の結果として，以下の２点が観察された。

① ブローカ失語症の被験者にとっては，移動距離に関係なく，A'-scrambling の方が A-scrambling よりも生成が困難であった。（「も」や「さえ」と言った focus 系の助詞の意味的効果を避けるため，A 移動にも A'移動にもこの手の focus 助詞を入れた。）

この帰結として，同じ短距離 OSV 語順の scrambling 文であっても，上記に記したように意味による影響を排除した上での違いであるので，この生成可能性の違いは，意味の複雑効果によるものでなく，統語的派生が異なることによると結論づけられる。すなわち，Miyagawa(2001)の派生が正しいとすれば，A-scrambling の主語名詞句は *v*P 内に留ることができ，時制辞Ｔの指定部に必ずしも移動しなくてよいという結果が得られたこととなる。

② A’-scrambling を上手く生成できなかった被験者が，同時に「が」格付与も上手くできないか？という点に関しては、両者に顕著な相関は見られなかった。
A’-scrambling に関して，短距離移動であっても，被験者のほとんどが上手く生成出来なかったのに対し，「が」格付与は，基本語順の SOV に関しては問題は見られなかった。すなわち，A’位置からの「が」格主語の認可に関しては，今回の失語症のデータからは，検証できなかった。

【得られた成果の国内外における位置づけとインパクト】

（１） 理論言語学に中で，主語名詞句の統語的位置について，モダリティと主語名詞句にあらわれる人称制限に焦点をあてて，議論した研究は数少ない。国語学・日本語学では，意味や語用論の観点からモダリティの意味と人称に関して古くから観察はされていたが(Nitta 1991 等)，本研究では，意味と語用の視点に対し，モダリティ形式と統語構造という観点を入れ，モダリティを捉え直した点は，日本語モダリティ分析にとって重要な方向性の一つだと考える。

（２） Miyagawa (2001)の V-T 主要部移動の有無による A-scrambling と A’-scrambling の識別を利用すると，被験者に対して，long-distance scrambling を使わずに(比較する文のモーラ数を変えること無しに)，A と A’移動の理解と生成の可能性を調査することが可能になる。これは，条件設定の厳しい心理実験・調査にも適切である。

（３） 先行研究において，ブローカ失語の被験者には，scrambling 文の生成が困難であることは，scrambling を許す言語（トルコ語等）ですでに報告されているが，同じ短距離移動で，かつ，同じ OSV 語順でも，A/A’移動の間に，顕著な差が見られることは観察としては，新しい。

【今後の展望】

（１） 理論言語学の観点からは，時制辞の主要部 T の関与と補文標識句の主要部 C の関与の識別が統語的にはかなり難しいところであるが，T と C の間にあらわれるモーダル形式を足がかりに今回よりもより厳密な統語上の識別をはかれる方法を見つけたいと思っている。

（２） 失文法研究からの検証という点について，上記の「研究開始時の背景」にも書いたように，英語やドイツ語からの報告の多くは，wh 疑問文の解釈と生成に関するものが多かった。これら wh 疑問詞は，日本語では，義務的な移動を伴わないため，今回は，A’位置というくくりで，あえて，A-scrambling と A’-scrambling の比較を行ったが，今後の展望としては，C 領域に特定した言語現象という意味で，不可視移動だとしても，日本語でも，やはり wh 疑問文の解釈も丁寧に観察し，その際の「が」格名詞句の意味機能（Kuno 1973）にも配慮したタスクを作り調査したいと思っている。

（３） ブローカ失語の被験者のモーダル形式の使用に関しても今後調査し，健常者のモーダル形式の使用の比較を行うことで，C 領域の機能が言語理論の予測するところと一致するのか否か明らかにできるのではないかと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

[1] Ueda, Yukiko. Person restriction and syntactic structure of Japanese modals. Scientific Approached to language, 7, 211-150, 2008, 査読無し.

[2] Ueda, Yukiko. Person restriction in CP-domain in Japanese. *WAFL* 5, MIT Working Papers in Linguistics, 49, 345-359, 2009, 発表採用時に査読あり.

[3] Ueda, Yukiko. The right periphery in the Japanese CP. Scientific Approaches to Language, 8, 95-118, 2009, 査読なし.

[4] 上田由紀子,「主語名詞句の統語的位置：モダリティと否定の作用域」,（掲載確定）.

〔学会発表〕（計５件）

[1] 上田由紀子,「日本語のモダリティと人称制限」，神田外語大学 CLS 主催『Syntax Workshop』，神田外語学院，2007 年９月３日（招待講演）

[2] Ueda, Yukiko. Person restriction in CP-domain in Japanese. *WAFL* 5,

University of London, 2008 年５月２３日，発表採用時に査読あり．

[3] 上田由紀子，「情報構造と統語構造の接点：CP 領域の機能」，神奈川大学主催『モダリティ・プロジェクト・ワークショップ』，神奈川大学，2009 年 12 月 5 日(招待講演)

[4] Ueda, Yukiko. Linguistics as a natural science. *International symposium: Reflecting on Scientificity of Linguistics.*, Akita University，2010 年 3 月 20 日．

[5] 上田由紀子，「主語名詞句の統語的位置：モダリティと否定の作用域」，神田外語大学 CLS 主催，神田外語大学，　2010 年 7 月 1 日．（確定）

〔図書〕（計 1 件）
上田由紀子，「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」，長谷川信子(編)『日本語の主文現象』，261-294，ひつじ書房，2007 年，査読あり．

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
上田由紀子（UEDA YUKIKO）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：90447194

(2)研究分担者

(3)連携研究者